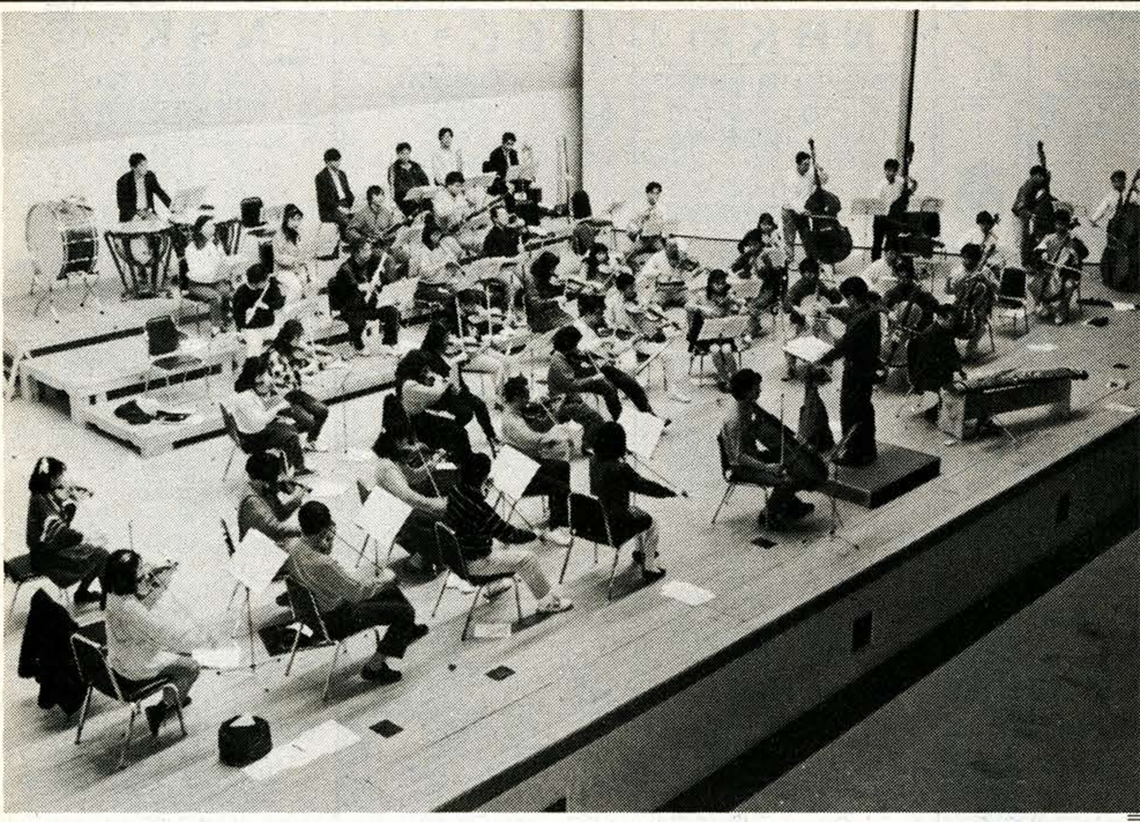

練習に打ちこむ釧路交響楽団

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

■中■

今日築いた団員の情熱

昭和53年 当初、20人でスタート

音楽

釧路交響楽団

（桜井敬一団長）

桜井敬一団長

歴代の指導者に深く感謝

八日に開かれた釧路交響楽団の第十五回定期演奏会。最後のプログラムのブラームス作曲「交響曲第一番」では金管が吠え、ティンパニーが文化会館大ホールを圧し、弦がふるえた。終了後の拍手を浴びる団員の姿から、長期間の練習をこなして燃焼し尽くした安らぎがあふれてくる。演奏者と聴衆の至福の一瞬だった。

釧路交響楽団は道東初のアマチュア・オーケストラとして、音楽好きの仲間が集まり、昭和五十三年に誕生した。当初は二十人ほどのささやかなアンサンブルで、初の演奏会には函館方面からも愛器を抱えた〝助っ人〟が駆けつけたという。沼尻会館での寒さにふるえながらの練習など、苦しい楽団草創期のエピソードも多い。

今回の受賞に際し、今井千鶴子マネジャーは「団員を指導して下さった初代指揮者の長野正美さん、二代目の木村雅信さんのご苦労、そして音楽監督・毛利巨摩さんなくしては、釧路交響楽団の今日の姿があったかどうか―」と胸を熱くする。

根室、帯広、北見からの団員も

チェリストとして発足当時から音楽指導にも当たってきた毛利さんは、東京芸大の非常勤講師。また現常任指揮者の泉史夫さん（富原中教諭）は、作曲家としても知られ、昭和六十三年度釧新郷土芸術賞を受賞し今回の定期演奏会では、自作の「湿原の陽」も振った。こうした指導者に恵まれて団員の士気は高まり、技術レベルの向上にも結びつく。

中学生一人を含めた地元団員は四十五人となり、平均年齢は三十代後半。しかしこれでは不十分なので根室、北見、帯広の奏者も加わり、本番では六十余人規模となる。「四市の団員がこうした形で、お互い協力し合ってきました」（今井マネジャー）。

「合唱」四楽章の通し演奏が夢

現在、創立時からの団員は六人。その一人、桜井敬一団長（釧教大附属中教諭）は「今日まで夢中で来た感じ。ヴァイオリンが一気に四人転勤した時は、この楽団にとっては存亡の危機だった」と振り返り「仕事を持つアマチュアの悲しさで日常の練習も大変。今、弦楽器が薄いので何とか弦メンバーを育てて、幅を広げ密度の濃いアンサンブルに」と課題を語る。

こうした団員個々の音楽に寄せる大きな情熱が、釧路交響楽団の今日を築いたと言える。今後、ベートーヴェンの交響曲第九番「合唱」を、全四楽章通しで演奏するのが大きな夢の一つだ。